

Title	楽天主義の犯罪
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 14 p.97-p.116
Issue Date	1996-02-29
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79689">https://hdl.handle.net/11094/79689</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 楽天主義の犯罪

武 藤 洋 二

### ПРЕСТУПЛЕНИЯ ОПТИМИЗМА

МУТО Ёдзи

- 1 “Социализм, который задуман как радость”
  - 2 “Лимит”
  - 3 “Разгрузка”
  - 4 Дочь Шпенцера
  - 5 Исключения
  - 6 Два списка
- Примечания

#### 1

ヴェーラ・インベルは、1890年6月28日（新暦7月10日）オデッサに生まれた。父は、学術図書出版社「数学」の経営者で、母は、ユダヤ女学校の校長である。インベルは、裕福で知的なユダヤ人家庭の一人娘であった。彼女は、<sup>ギムナージヤ</sup>中学校を出たあと、オデッサ高等女学校の歴史・文学部へ入学したが、すぐに西ヨーロッパへ行く。4年間の外国生活のうち、1年間スイスで肺病の療養をした以外は、パリですごす。

後にソヴェト体制下で「喜び」と「楽天主義」を売りものにして文筆業をすることになるインベルが、1912年にパリで出版した最初の詩集は、『悲しいぶどう酒』であった。

インベルは、第一次大戦の1ヵ月前に帰国した。十月革命後の国内戦で革命権力が勝利した1920年、21年に、インベルは、故郷オデッサで軽演劇の小さな劇団のために台本を書く。これは、今まで赤軍と白軍のどちらが勝つか様子をながめていた者たちが、白軍と共に国外へ逃亡したり、逆に、ボリシェヴィキー権力への支持を急にはっきりと表明した時期である。インベルは、例えば、トランプのカードたちがスペードの王様を倒す劇を作った。つい数年前にロマノフ王朝が滅び、その再興が不可能になった時点で、インベルは、「超革命的で、超現代的で、“時流に合っ

た”」(1)寸劇を書くのである。

いわゆる“プチ・ブル”で、革命勢力とは縁遠い存在だとみなされているフランス帰りの詩人は、たくましい順応力を発揮する。その時その場の政治情勢にたいする、すばやい保身的反応は、インベルの一生を通じて変わらない。

1925年にインベルの革命後はじめての詩集『目的と道』が国立出版所から3,000部で出版された。ここには、1922年からレーニンが死んだ1924年までにつくられた15篇の詩が入っている。レーニンの死にさいして書かれた『5昼夜』を冒頭にかかげたこの薄っぺらい詩集は、インベルによるソヴェト体制への親近感の誇示であり、この体制下で詩人として生きていこうとする意欲の表明である。未来のソヴェトに建てられるレーニン像を詠んだ『そうなるだろう』が、レーニン追悼の詩に続く。どちらも他愛ないもので、身過ぎ、世渡りのための代物である。

インベルは、極左的批評家からは社会主義権力の「他人」あつかいされ、彼女は、自分をソヴェト文学における「まま娘」だと感じていた。

「身内」へ加えてもらうために、インベルは力をつくす。

悲しみですらし向けることができる

社会主義のために働くように(2)

1931年、流血の集団化の最中に書かれたこの句は、スターリン体制下におけるインベルの姿勢、処世術をあらわしている。

血だらけの手をしながら、口では楽天主義をとる国家権力に調子をあわせて、インベルは、いかなる政治犯罪、悪政、民衆の受難があろうとも、「社会主義の成果」にはしゃぐ楽天主家を演じることになる。

楽天主義とは、社会主義建設の音頭である。

社会主義の建国事業が犠牲を前提として行われているなかで、楽天主義は、建国の犠牲者、受難者を無視し、バラ色の遠い未来の第一歩としての今を讃美する。

1933年8月、犯罪者を労働によって「鍛えなおす」歴史的試みとして鳴りもの入りで行われた、白海・バルト海運河の建設現場へ、スターリンの指示で政治警察が120人の作家と詩人を招いた。インベルも入っている。

前年、白海・バルト海収容所は、『海と海をつなごう』という題で囚人の詩集を発行した。これは、囚人労働の現場からの労働讃歌である。巻頭にスターリンの言葉がかかげられている。そこで独裁者は、かつて恥ずべきつらい重荷とみなされていた労働が、社会主義的競争のおかげで、名誉の、栄光の、勇気の、英雄的行為の仕事になった、こんなことは資本主義国ではあり得ない、と言っている。(3)

スターリンは、重労働の成果を競わせる仕掛けをし、囚人たちを仕事にかり立て、しかもその

ことを恩にきせている。ソヴェト文学は、この恩について書くだろう。囚人たちの自画自讃に続いて玄人の文学者たちが讃歌集を出すだろう。

作家たちを運河へ連れていく特別仕立ての汽車に入ると、そこは別世界である。農民集団化による2年続きの飢饉にもかかわらず、一行は、チーズ、キャビア、ソーセージ、チョコレート、果物、ぶどう酒、ブランディ等を無料で無制限に食べたり飲んだりすることができた。

当時まだ駆け出しの作家だったアレクサンドル・アヴジェエニコは、汽車の内と外とのすさまじい違いに驚く。

どこでも線路にそって、ボロボロの服をきた、裸足の、やつれはてた子供や老人たちが立っていた。骨と皮の、ガリガリ亡者たち。彼らは皆そばを通りすぎていく列車に向かって手をのばす。皆の唇には、かんたんに推察できる一語があった——パン、パン、パン。物乞いをしているのだ。何百年にわたって彼らは、都会の人間を食べさせてきたのに、今は……(4)

彼らは、農民集団化で自分の土地から切り離され、しかも来年の種子用の穀物まで取りあげられた、かつての百姓たちである。社会主義建設を讃美するために、囚人が働く現場へ向かうソヴェト文学の代表者たちに、社会主義建設の犠牲者たちが、パンをねだっている。走る汽車の中から彼らの言葉は聞こえないが、パンを、と言っているのは聞くまでもなく分かる。

文学者の一行は、任務をさずけられた出張者である。汽車のなかの無料の豪華な宴は、国家に特別待遇で雇われる旨みを、詩人にも作家にも感じさせる。

この光景は、現実（建国事業の犠牲）と文学に課せられた任務（建国事業の讃美）との関係を図示している。一行の世話をしている統合国家政治局は、囚人をつくり、白海・バルト海運河建設を受けもち、また全土にわたって弾圧、抑圧の仕事を行っている政治警察である。スターリン自ら言うように、政治警察は、「ソヴェト権力の抜き身の刀」である。囚人としてではなく、お客として彼らの世話をうけることもまた、文学者たちに、自分たちの特権的な立場を感じさせただろう。

もしその気になれば、つまり、汽車の目的地がどこであるかを十分にこころえたうえで、熱心に奉公すれば、一生をこの汽車の乗客として暮らすことができるかもしれない。内面の葛藤に軽重の差はあれ、多くの文学者がスターリン時代を乗客としてすごした。インベルは、その典型である。インベルとその同類であるソヴェト文学の多数派は、食堂車の豊かな食事を社会主義の現実として讃美する。

体制の合言葉としての楽天主義は、窓の外の現実を切り捨てる。運河への団体旅行から1年たった1934年8月、ソヴェト作家同盟の第一回大会で、インベルは、自分がこの楽天主義の権化であることを皆に印象づける。

インベルは、未完の自作から主人公の言葉を紹介する。「プロレタリアートは、悲しみにふけ

ると、喜びとして構想された社会主義を建設することができない。」<sup>(5)</sup>

インベルによれば、「喜びとしての社会主義」にふさわしい文学は、「楽天的文学」であり、世界文学史の主流は、悲しみ憂いにみちた悲観的文学だから、ソヴェト文学は、世界文学に逆らうかたちで進んでいくことになる。「われわれは、世界文学を逆なでしながら進んでいく。われわれは、燃料の種類をとりかえられたエンジンに似ている。」<sup>(6)</sup>、とのべて、悲しみでなく喜びをえがくことがどんなにしんどい仕事であるかをインベルは強調した。

悲しみという燃料でなく喜びという燃料で動くエンジンが、楽天主義をかかげる文学者である。これは、あの特別列車のエンジンにふさわしい。

スターリン時代は、その全期間を通じて、建国期である。建国の祭の時代に求められる楽天的文学という御祝儀文学を、インベルは、自分たちに義務づけたのである。

## 2

1934年2月、農民集団化にたいして党は勝利を宣言し、同年12月キーロフ暗殺のあと、大量逮捕が続ぎ、集団的逮捕と処刑の異常な時期が始まりかけていた。

1934年12月16日、カーメネフとジノーヴィエフが逮捕された。これは、キーロフ暗殺を現在外国にいるトロツキイと結びつけ、国内にいるかつてのスターリンの批判者、反対派をその一味として処刑する「モスクワ裁判」の準備である。

世の中が非常事態の様相を呈し始めても、インベルの楽天主義がゆらぐことはない。むしろ、闇がこくなれば光を強調するのが、楽天主義という政治的処世術の特徴である。

世界史の全期間を通じて、こんなに内容豊かな、幸せな、花咲ける現実が根づいたのは、われわれのところ、我が国が初めてであります。<sup>(7)</sup>

インベルがこのように発言した半年後に、第一回「モスクワ裁判」がおこなわれ、カーメネフ、ジノーヴィエフなど16人が処刑された。しかし、公開され全世界に報道された3回にわたる「モスクワ裁判」よりも、秘密に行われた人間狩りの方にスターリン体制の本質があらわれている。

それは、敵を殺したことにではなく、敵の数を人口比で推計して、誰を、ではなく、何人を、が指示されたことにあらわれている。これは、癌細胞をとるだけでなく、癌が確認されていない部分まで予防的に切除する外科手術に似ている。予防の目的からは、健康な部分の切除が意味をもつように、無関係な人間の処刑・処分も意味をもつ。

1937年7月2日の党中央委員会決定にもとづいて、不特定多数の民衆を対象として予防処置がとられることになった。スターリンが直接指導し、内務人民委員ニコライ・エジョーフが実行責任者となって、15ヵ月間にわたって民衆の命の間引きがおこなわれる。

スターリンは、前もって地方から呈出された敵性分子についての報告書を参考にして、ソヴェト内の各共和国、ロシヤの各州へ達成すべき数の上限を指示した。数字は、第一種（銃殺）と第二種（囚人）に分けられた。

上限という表現には意味がある。これは、数字の指定ではなく、数を制限したかのような体裁をとっている。たとえば、第一種に1,000人というわくをもらった地方組織は、800人銃殺するだけでもよいはずである。ところが、生産割当高の超過達成が半ば義務的になっているスターリン体制下では、上限は、達成してあたりまえになる。各地にもうけられた3人委員会（党書記、内務人民委員部支部長、検事正）は、皆この上限数まで逮捕し、超過達成にとりかかる。上限という表現がとられているために、それを越えるには許可がいる。各地方は申し合わせたように同じ行動にでる。増量を中央へ要求したのである。

たとえば、アルメニア共和国の3人委員会は、スターリン、エジョーフあてに極秘の暗号電報を送った。

……アルメニアを実質的に粛清するため旧ダシナクツウチュン党员その他の反ソ分子の内から、追加として700人銃殺することを許可されたし。許可ずみの第一種500人のわくはすでに満たされつつあり。

ミコヤン、マレンコフ、リトヴィン

1937年9月22日<sup>(8)</sup>

さらに700人銃殺させてほしいという要求にたいして、スターリンは、要求より2倍以上も多い1,500人を追加分として銃殺する許可を2日後に与えた。<sup>(9)</sup>

他の地方も似たりよったりである。ダゲスタンは、第一種の上限600人を1,200人へ、第二種2,478人を3,300人へ増員する要求をだし、即日、希望どおりに認められている。<sup>(10)</sup>

地方の責任者たちは、追加をおねだりすることによってスターリンより一そうスターリン的であろうとした。生け贄の数を増すことによって、彼らは、この数字がふりかかってこない安全地帯へ我が身をおいたつもりであった。

1938年1月31日、こんどはスターリンの側から22ヵ所に追加表が送られた。この表では、第一種が合計48,000人、第二種が9,200人である。しかも期限付きである。極東地方（第一種8,000人、第二種2,000人）は1938年4月1日まで、つまり、2ヵ月以内に、他の21ヵ所は3月15日まで、つまり、1ヵ月半以内に、この2種類の数字を消化しなければならない。<sup>(11)</sup>

中央と地方のあいだに1年4ヵ月半にわたって暗号電報がとびかったあと、1938年11月15日、突然スターリン、モロトフの連名で中止命令が出された。2日後にその理由を書いた極秘の文書がつくられた。

1937-38年に内務人民委員部により実施された、敵性分子の粉碎と根絶の大規模な作戦行動は、審理と裁判とをないがしろにしたため、内務人民委員部と検察局との業務に一連のこの上もなく大きな欠陥と歪曲とをもたらさざるを得なかった。それだけでなく、内務人民委員部にもぐりこんだ人民の敵と外国の諜報機関のスパイとが、ソヴェトの法律を意図的にまげ、根拠のない大量逮捕を行った、このさい、内務人民委員部にひとときわ多く巣くっている仲間が粉碎されないようにしたのである。<sup>(12)</sup>

殺しすぎたのである。囚人をあまりにも短期間に多くつくりすぎたのである。働き手が消えて、党の機関や役所では、部分的に機能が麻痺するところまで来た。スターリンには、兵をひく必要があった。

ここで「超過達成」が犯罪になる。「超過達成」という手柄は、「やり過ぎ」という罪に変る。これは、スターリン体制下でよく使われた手である。1937年に「人民の敵」狩りの功績で勲章をもらった内務人民委員部の高官のなかから、1938年にはその同じ行為をとがめられて銃殺される者がでてくる。意気揚々と犠牲者の増員を打電した者のなかからも、銃殺される者がでてくる。

実行責任者である内務人民委員エジョーフやその部下たちは、集中的に「人民の敵」狩りをやらされ、これ以上いらないほど獲物がとれると、掟を無視して勝手に乱獲した犯罪者、「人民の敵」となる。

内務人民委員部と検察局にもぐりこんだ「人民の敵」が、そこでの業務を「党の機関から引き離し、党の統制と指導からのがれようと万事手をつくしたからこそ」あのようなひどいことになったのだと、極秘文書は、党を免罪する。これは、内務人民委員部の幹部に責任をなすりつけ、人民委員と幹部とを処刑し、人員をいれかえるためのスターリンの作文である。

「スターリンの忠実で献身的な友」エジョーフの前では、「敵たちが震えおののき／彼の愛国心は不変で／国は彼を最良の息子として大切にする」<sup>(13)</sup>と、詩人ジャンプールにうたわれた内務人民委員ニコライ・エジョーフは、使い捨ての下手人として、前任者ヤゴダと同じく、銃殺される。

民衆には、いかなる弁解も必要ではなかった。エジョーフの銃殺すら秘密にされた。

1930年代の全期間を通じて首相であり、中止命令にスターリンと共に署名したモーロトフは、96才で死ぬまでスターリンの行ったことを正しいと信じていた。

1937年は、不可欠であった。革命後われわれは、手あたりしだいに切りまくり、勝利をおさめた、しかし、いろんな類の敵の残党があって、ファシストの侵略のせまりくる危険性を前にして、彼らが結託する可能性があった。戦時中に我が国に第5列がなかったのは1937年のおかげである。ポリシェヴィキーのなかにすら、万事うまくいっていて、国にも党にもさししまった危険がない間は、良くて、献身的だというのが居る。しかし、何か事がおきると、

奴らは、動揺し、寝返るのだ。(14)

モーロトフは、予防処置として、念のために殺しておいたのは正しかった、と年金生活者になってからも一貫して主張した。スターリン体制下では、疑われ、危険視され、信用されないだけでその人物はすでに罪人である。事実がないために、脚本がつくられたのである。

一種と二種に分けて、人間狩りがおこなわれている最中、1937年秋に、極東に住んでいる30万人の朝鮮人が、カザフスタンと中央アジアへ強制移住させられた。これは、将来に予想される日本との戦争のさいに、朝鮮人たちが日本の協力者に、スパイになるのを予防するためである。民族全体が一人の罪人のようにあつかわれた。このような予防処置がとれるほど、国家権力は強大になっていた。

### 3

第一種の逮捕者は、すぐに銃殺することになっているので、この世から消えてしまう。第二種の逮捕者は、収容所へ送られ、労働力として使役される。収容所は、囚人労働による国有企業として生産高をあげなければならないので、多数の囚人が必要である。ところが、1937年夏から始まった大量逮捕のおかげで、必要以上の囚人が収容所へ送られてきた。

収容所当局は、囚人たちを収容する場所も確保できない。テントに入れたり、原野に送り、そこで囚人自からに収容所をつくらせたりした。それでも追いつかない。そこで「荷おろし」がおこなわれることになった。荷物をおろして軽くするという鉄道用語からの転用は、言葉に真の意味が直接あらわれないようにする政治警察、あるいは、一般に、強権に仕え強権を発揮する官僚の語法である。

「荷おろし」は、囚人の一部を釈放することではない。それは、娑婆に返さずに囚人を間引くことである。このため、基本的には、2つの方法がとられた。

- (1) 極度に苛酷な条件下で長時間の重労働をさせて自滅させる。
- (2) 銃殺する。

たとえば、コリマーの収容所群では、1938年にマガダンの西にあるセルバンチンカで、大量の囚人が銃殺された。これは、収容所本部長の名をとって「ガラーニンの銃殺」とよばれた。これは、「荷おろし」であり、同時に、スターリンが極東地方に命じた第一種8,000人の増量を達成する仕事と重なっている。第一種を娑婆からではなく、囚人から選ぶことによって、コリマーの収容所は一挙両得の仕事をしたのである。

「荷おろし」をやりとげたガラーニンは、「絶滅者の絶滅」というスターリン体制の掟どおり、1年たった1939年に「人民の敵」として、エジョーフの手下として、銃殺された。

「荷おろし」にいきつく人間の乱獲の場は、民衆の日常生活である。「黒い鳥」とよばれる内



務人民委員部の車が、深夜に、明け方に、突然やって来て、獲物を入れて走り去る。家族、親類、友人知人、同僚、隣人のなかから逮捕者をだしていないソヴェト市民はいない。

誰れもが不安と恐怖のなかで生きている。

インベルも我が身が心配である。

1937年の彼女の日記には、自分が干されているような、人から避けられているような、不安な気分がにじみでている。インベルにとって、日々の幸福の尺度は、国家権力の彼女にたいする好感度である。1937年のような異常な年では、これは身の安全の尺度になる。直接的な弾圧は受けていないが、お上によそよそしい態度をとられ、原稿や催し物への出席の依頼がとだえ、身のまわりの空気の流れが変わり、友人知人が何かを直感して遠のいていく。この事実そのものが「恐ろしい警告」である。何か「政治的な原因」を感じとったインベルは、常にそうであるように、仕事でのりきろうとする。

インベルは、作家の一团と共に1938年の正月をグルジャですごす。グルジャは、ソヴェト内の単なる一共和国ではない。それは、スターリンの故郷として特別の地位にある。インベルにとってグルジャ訪問は、スターリン・グルジャ讃歌を書くための出稼ぎである。1938年の前半をこれにあてて、インベルは、『旅日記』という長編詩を書きあげた。

想像をたくましくして

どこかに火星人の天文学者がいるとしたら

彼は言うだろう、「地球の六分の一が

奇妙に輝いていた」と<sup>(15)</sup>

ソヴェトの国土は、地球の六分の一を占める。自国にたいする度はずれた讃美は、人間狩りがおこなわれていた真最中に書かれた。血を光と入れ替えるのは「楽天主義」の仕業である。「楽天主義」は、インベルにとって生きる技の総称だから不思議ではない。浮世ばなれした、平和で、明るい旅の歌日記は、人類史上最大の独裁者ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・スターリンへの祝盃でしめくくられる。

万物の極みとしての

ヨシフ

ヴィサリオノヴィチ

あなたのために <sup>(16)</sup>

『旅日記』は好評だった。インベルは、永久凍土から暖かい所へ移ったようだと大喜びする。<sup>(17)</sup> スターリンの出身地をほめ讃え、スターリンの生家を「人類の宝物」とよび、スターリンへの乾

盃の音頭でしめくくられている作品を、1930年代末のソヴェトで、けなすのはむづかしかった。

インベルは、機会があるごとに、いわば権力への挨拶がわりに、ソヴェトの現状をはめる。700年前の詩人について語るときでも、このためにソヴェトへまいもどってくる。

12世紀グルジアの大詩人ショタ・ルスタヴェリは、『虎皮の騎士』の作者として、グルジア文化の中心的存在である。

進歩的な人類の最良の希望を体現している真の詩の言葉は、不滅である。これを証明するのが『虎皮の騎士』にまつわる出来事である。この長編詩は、クラ河に沈められたり、焚書のめにあった。たちの悪い無知や、悪意をもった偽善によって、この作品は人間の記憶から焼きはられようとしたのである。しかし、詩の言葉は、水の中に沈まず、火の中で燃えず、時がたっても色あせない。われわれソヴェトの詩人は、このことをひととき覚えておくべきである。われわれの言葉に耳をかたむけると、石ですら喜びのあまり微笑んでしまうほどにわれわれの詩を完璧な、喜ばしいものにする全てが、全ての前提条件が、我が国にそなわっているのである。(18)

『虎皮の騎士』の主人公アフタンジルが悲しい歌を歌ったら、石が河から出てきて、聴きほれ、涙を流した。インベルは、この悲しい歌を喜びの歌に変えてしまい、ソヴェト讃美に使う。彼女は、1934年の作家同盟第一回大会の演壇で公言した「喜び」と「楽天主義」に、1938年でも、いやこの時期、この状況下だからこそ、忠実である。

悲歌こそがふさわしい現実のなかで、自ら恐怖にふるえながら、仲間の詩人たちに喜びの詩を書くよう呼びかけることによって、インベルは、詩人ではなく、いわば、詩官としてふるまっている。詩人や作家から逮捕者がでている。彼女は、自分が生き残るために文学を利用することによって、文学を裏切る。天職を裏切って、天職に寄生する。これは、天職を盾にすることはあっても、決して天職に殉じない類の人間である。したがって、インベルは、世の中の多数派に属する。

例外的な少数派は、1938年の状況にたいしてインベルとは逆の反応をした。ミハイル・ジョーロホフは、後にノーベル文学賞を受賞するが、受賞の最大の根拠となった『静かなドン』が盗作であると強い疑いがもたれている。また晩年には、ソヴェト体制の最右翼として、体制批判者を公けの席で口汚くののしるなど忌まわしい役割を演じた。しかし、1938年2月には、彼は、権力の蛮行にたまりかねてスターリンに手紙を書いている。

逮捕者にたいする恥ずべき拷問制度をなくさなければなりません。5日から10日にわたって休みなく続く尋問を許してはなりません。そのような取り調べのやり方は、内務人民委員部の栄ある名を汚がし、しかも真実をつきとめることにはならないのです。

知り合いのコルホーズ員たちから私自身が一度ならず聞いたのですが、彼らは一種の「動員準備態勢」をとってくらしています。つまり、逮捕にそなえて、乾パンをたくわえ、きれいな下着のかえを常に用意しているのです。スターリン同志、これは一体なんの役にたつでしょうか。去年のすばらしい収穫がほとんど取りいれられないままに大量の麦が畑でくさってしまい、種子は保存されず、春まき用の畑が途中までしか耕されていないのは、こういう事情のせいではありませんか。

親愛なる同志スターリン、あなたに直き直きをお願いします——あなたはいつもわれわれに対して思いやりがありました——党中央委員会にもお願いします——当方の問題を最後まで究明して下さい。(19)

田舎に住んでいるショーロホフは、農民をとりあげ、スターリンに善処を求めているが、「かつての富農その他の反ソ分子」から逮捕の追加を命じたのはスターリンである。だから、農民集団化ですでに痛めつけられている農民から、あらためて多くの逮捕者が出たのである。

ショーロホフは、逮捕された者でなく、逮捕している者が、「党と人民の敵」であると、内務人民委員部ロストフ支部を、スターリンあての手紙で激しく非難している。(20)この大胆な手紙は、党内で正式に検討されたが、内務人民委員部ロストフ支部もショーロホフも無事であった。

もし万一ショーロホフが国家に必要でない人物なら、政治警察を告発したこの手紙で、彼は一生を棒にふっただろう。一個人がスターリン体制下で、生存の多少とも確かな保証を得ようとするれば、国家に自分のかけがえのない有用性を分からせなければならない。そうすれば、多少忠実に欠けるところがあっても、重用してくれる。ノーベル賞受賞者で世界の生理学界の指導者であったパーヴロフは、政治批判を日常的に口にし、政府高官への手紙でも根本的な体制批判を行ったが、彼は、無事であったどころか、国宝的存在として大切にされた。

インベルには、国家が文句なしに欲しがる超一流の才能はない。彼女は、二流あるいは三流詩人だから、国家権力への忠実さによって自分を売りこまなければならない。「楽天主義」をふりまくのも、国家権力への信号である。

二流は一流より殺されやすい。

しかもインベルには、命をおびやかす特殊な事情があった。

4

軍事革命委員会議長レフ・トロツキイは、十月革命と国内戦の第一線で最高責任者として活躍した。彼は、武装した汽車で動乱の国内をまわり、戦線を指揮し、各地で雄弁をふるって兵士をはげまし、民衆を煽動した。しかし、彼は、革命の単なる実務家ではない。党政治局員、外務人民委員、軍事人民委員であったが、彼は、文筆活動に情熱をそそぐ。革命政権第二の人物は、お

びただしい政治論文を発表するだけでなく、詩について、絵画について評論を書くのである。彼は、新生活の全部門にわたって発言しようとした。自尊心と野心と知的優越感が極めて強いトロツキイは、革命の単なる実行者ではなく、革命の魂になろうとしたのである。

トロツキイに「鈍才」だと軽蔑されていたスターリンは、党組織の実務に専念し、新しい官僚たちの頭になった。国内戦が終り、平時の日常業務が始まり、スターリンが党書記長になるころ、トロツキイは、歴史の絵舞台を下りていく。レーニン死後の党内論争と権力争いのなかで、トロツキイはスターリンの最大の敵となる。スターリンは、トロツキイを組織的に追いつめ、追い放うことに成功する。1926年10月に最高権力機関である党政治局の正局員の地位を失い、1927年10月には党中央委員を解任されたのち、1ヵ月後には党から除名されて、トロツキイは、何の権力も持たない一民間人となる。

モスクワから中央アジアのアルマ・アターへ流されたのち、1929年1月トルコへ国外追放され、トロツキイは、母国から永久に切り離された。スターリンがトロツキイのためにトルコを選んだのは、反革命の残党がトルコに多くいるので、トロツキイが暗殺されることを期待したからだといわれる。

トロツキイは、国外からスターリン体制を徹底的に批判し、革命のユダ、専制的官僚国家の独裁者スターリンを、その政策だけでなく、知性人格にいたるまで痛罵し、皮肉り、毒舌をあげせた。彼は、スターリンがつく限りない嘘をあばき続けた。スターリンにとってトロツキイは、国外へ追放されてからさらに凶悪な敵となったのである。

スターリンは、3回にわたる「モスクワ裁判」で、トロツキイが国家転覆、国土売却、政府要人の暗殺、生産の妨害活動の総指揮者で、ソヴェトにとって最大の敵であることを、ソヴェト人の意識の中にたたきこんだ。「モスクワ裁判」は、ソヴェトをとりかこむ敵陣営の中心にトロツキイがいて、内外の手下トロツキストがいたところで策動していることを民衆に学ばせる政治教育の場となった。キリスト教国における悪魔的という言葉と同じ忌まわしさと危険性をもって、トロツキスト的という言葉が使われるようになる。トロツキイは、いわば法王スターリンに悪魔と断定され、彼を呪うのが全国民の義務になる。

トロツキイとのかかわり、つながりは、したがって、犯罪である。彼の家族、親類、部下、秘書、同調者、何らかの関係があった者は、投獄され、流刑になり、銃殺された。

トロツキイには前妻アレクサンドラ・ソコロフスカヤとの間に2人の娘がいる。長女ジナイーダは、ベルリンで結核の治療をしていたが、ソヴェトの要求によりドイツの官憲からベルリン退去を命じられ、前途を悲観して、1933年1月5日ガス自殺した。次女ニーナは、すでに1928年6月結核で死んでいる。後妻ナターリヤ・セドーヴァとの間にはレフとセルゲイという2人の息子がいた。長男レフは、トロツキイの最良の協力者であり、スターリニズムとの闘争の実務を担当した。彼は、1938年2月パリで盲腸炎の手術をうけ、快方にむかったところ、数日後に死んだ。状況証拠から、毒殺されたと考えられる。次男のセルゲイは、ソヴェトに残り、工科大学の教授

になる。彼は、1935年3月4日逮捕され、シベリヤへ流刑になり、労働者たちをガスで殺そうとしたという“罪状”で、1937年10月29日銃殺された。

トロツキイには、2人の姉妹エリザヴェータとオリガ、および兄アレクサンドルがいた。エリザヴェータは、トロツキイが失脚する前に病死する。オリガは、カーメネフの妻となり、1941年に、アレクサンドルは1937年に、それぞれ銃殺された。前妻ソコロフスカヤは流刑になった。

最も進歩的な体制だと自讃しているスターリン体制は、古代や中世の“血の連座制”とでも言うべきものを掟にしている。それがトロツキイ一族に最もきびしく適用された。血のつながりは、共犯を意味するのである。

インベルは、トロツキイと血のつながりがあった。

追放されたばかりのトロツキイは、トルコのプリンキポ島で『我が生涯』を書いた。この自伝に、少年トロツキイが大変世話になり、その人間形成に大きな役割をはたした親類が登場する。それは、彼の母親の甥で、28才のモイセイ・フィリポヴィチ・シベンツェルである。トロツキイという変名を使用するはるか以前に、ヘルソン県の富農の息子レフ・ブロンシテインは、このシベンツェルの家に下宿して、オデッサでルッター派の聖パウロ実業学校に通った。シベンツェルは、田舎の子であるレフに、都会風の礼儀作法の初歩を教える。レフは、6年のあいだこのシベンツェルの影響下にあった。シベンツェルは、挨拶の仕方、食事の作法、身だしなみを彼に教え、ひどいウクライナ語なまりのロシア語を正し、読書や観劇の楽しさを覚えさせる。おかげで少年は「小さな都会人」になった。母親の甥によって、トロツキイのルネサンス的な広い教養の基礎がつくれ、その第一級の文筆の才能も開拓された。シベンツェルは、トロツキイという歴史的人物の形成の基礎づくりをしたのである。

トロツキイが伝えるシベンツェルとインベルが語る彼女の父親とのあいだに、一連の共通点がある。(21)

ト ロ ツ キ イ	イ ソ ベ ル
彼は少し統計をやっていた。	エリザヴェトグラド郡では父は人口調査の統計にたずさわったことがある。（『私の父について』）
彼は小さな出版社をおこした。10～12年後に南ロシアで指おりの出版社になった。	父は出版社をやっていた。そこでは学校で必要なもの全てが印刷された。（同上） 父は学術出版社「数学」の社長であった。（『かんたんな自伝』）
シベンツェルはユダヤ人の子女のためのオデッサ公立女学校の校長と結婚しようとしていた。	母は学校の校長だった。（『私の父について』） 母は教育者だった。公立の女学校でロシア語を教え、後にここの校長になった。（『かんたんな自伝』）

トロツキイが、シペンツェルの家に住みこんで、聖パウロ実業学校へ通いだしたのが1888年である。インベルは1890年に生まれている。トロツキイは、シペンツェルに一人の幼な児がいたと記している。

トロツキイの母親の甥シペンツェルとインベルの父親とは同一人物である。幼な児はインベルである。トロツキイとインベルは、約4年間おなじ屋根の下でくらしした。

出版社主シペンツェルは、印刷所も持っていた。ここにヤーコフ・シャトゥノフスキイという革命家が、身をかくしながら働いていた。彼は、若いトロツキイの革命運動の仲間である。後になって、シャトゥノフスキイの妻リージャは、書いている。

まだ革命の前、非合法にオデッサで暮らしながら、夫は、警察から身をかくして、裕福なオデッサの実業家モイセイ・シペンツェル——トロツキイ（レフ・ブロンシテイン）の実際の叔父——の印刷所で働いていた。この印刷所に若いトロツキイも身をかくしており、自由主義的な叔父が承知の上で、そして、その祝福を受けて、印刷工の非合法的なマルクス主義的組織を指導していた。<sup>(22)</sup>

シャトゥノフスカヤは、シペンツェルに注をつけている。

“超ソヴェト的な”詩人で作家であるヴェーラ・インベルは、このシペンツェルの娘であり、トロツキイのいとこであった。自明の理由で、彼女は自分の経歴のこのあたりのことについては触れたがらない。しかも、彼女について書いた者も、彼女の経歴のこの“汚点”については、ほうかむりしようと努めてきたのである。<sup>(23)</sup>

トロツキイがまだソヴェト権力の頂点にいた1923年から24年にかけて、ロシヤに滞在したマックス・イーストマンは、関係者からトロツキイの青少年時代について聞きだしている。前妻アレクサンドラ・ソコロフスカヤ、後妻ナターリヤ・セドーヴァ等にまじって、「シペンツェル夫妻とその娘」に取材している。この事は、シペンツェル家とトロツキイとの関係をあらためて証明している。この時期は、トロツキイとの縁つづきは極めて名誉のある喜ばしいことであり、シペンツェル夫妻だけでなく、その娘も進んでトロツキイについて語っただろう。シペンツェル一家からの聞き取りを元にしたと思われる、この娘についての記述がイーストマンの本にある。

こうして九才のときトロツキイは新しい両親の新しい家庭に着いた。新しい両親は彼の面倒をみる、つまり、あまり猛烈に勉強させないようにし、赤ちゃんをかわいがりすぎて殺してしまわないように気をつけることになっていた。こうしたことは、明らかに、彼の大きな悪癖だった。赤ちゃんは彼がその家に着いたとき、やっと生まれて三週間、彼は赤ちゃんの

成長を深い愛情をこめて見まもるのだった。彼女は彼を兄とも思い、シベリアから彼女のもとへ届いた、ツァーの検閲で破られ塗りつぶされた彼の手紙の断片を、宝石のように、いつもしんでいる。(24)

トロツキイがその家に着いたとき、すでに赤ん坊がいたというのは、記憶まちがいか、あるいは、イーストマンの聞きまちがいである。ここで重要なのは、トロツキイが後にシベリヤの流刑地から送った手紙を、1923～24年の時点では、インベルが宝物あつかいにしているという証言である。トロツキイが国家第二の重要人物であった時には、インベルは、血のつながりのある偉大な人物を誇りにしていたのである。

インベルは、トロツキイとのつながりから、自動的にカーメネフ一家とも縁続きになる。カーメネフ夫人オリガは、トロツキイの妹である。カーメネフは、党政治局の正局員としてレーニン、トロツキイにつぐソヴェト政権の代表者であり、さまざまな要職についた。党内闘争が始まると、彼は、スターリン、ジノーヴィエフと組んで、義兄トロツキイに敵対した。しかし、スターリンが強権をにぎるにつれて、カーメネフは、その批判者となり、スターリンによって権力の座から蹴落とされ、1936年の第一回「モスクワ裁判」でトロツキイの共犯者として死刑になった。

カーメネフには、オリガとの間に2人の息子がいた。彼らはトロツキイの甥になる。ユーリイは、1938年1月30日、16才で、アレクサンドルは、1939年7月15日、33才で、それぞれ銃殺された。カーメネフ夫人は、1941年秋に銃殺された。赤ん坊だった孫のヴィターリクは、大きくなるまで待って、15年後に逮捕され、極寒の地へ流刑になる。カーメネフの弟夫婦も犠牲になった。

カーメネフは、息子たちの命を救うために、自分がやってもいない犯罪について、当局の脚本どおりに嘘の証言をし、公判の最後の日には、息子たちへの遺言として、スターリンに従って進めと言った。それは家族の命ごいだったが、何んのききめもなかった。

5

カーメネフから権力に都合のいい自白をひきだそうとしていた予審判事ミローノフは、この大物の囚人が言いなりにならないので困って、スターリンに訴えた。

「われわれの国家は、そこにある工場、機械、軍隊、兵器、海軍の全部をひっくるめて、どれほどの重量になるか」と、スターリンはミローノフにたずねる。困った予審判事は、誰にも分かりません、天文学的数字になりますと答えた。「一人の人間が、そんな天文学的な重圧に対抗できるのか」と独裁者はさらにきく。出来ませんという答をミローノフから引き出すと、スターリンは、カーメネフであれ他の囚人であれ、そのような圧力に耐える能力があるなどと、これからも決して私に言ってはならない」とさとした。(25)

スターリン体制下では、各人の頭上に、国家という天文学的数字であらわされる重さの岩が、

ぶらさがっていたのである。ガリヴァーがおとずれたある国では、権力機構は空飛ぶ島にあって、民衆の頭上に浮かんでいる。反乱でもあれば、急降下して人間をつぶしてしまう。スターリン体制下に在るとは、この島の下に住むことである。いかなる個人も、上から下りてくる島をはねかえすことはできない。

トロツキイとカーメネフという超大型の「人民の敵」とつながっているインベルは、この重圧の下で油汗を流しながら生きている。彼女は、圧死しないために、上から聞こえてくる「楽天主義」のかけ声に唱和し、「喜び」と「楽天主義」を自己救済の呪文にした。呪文が効いたのか、トロツキイとは何の関係もない者が「トロツキスト的反革命活動」等々で逮捕されていき、トロツキイとカーメネフの親類縁者が血祭りにあげられていくのに、インベルは、危険な兆候を感じたとはいえ、無事であった。

トロツキイの精神的な父ともいえる人物を、娘の立場から好意的にえがいた『私の父について』(1938年)が、印刷され、スターリン時代を通じてインベルの著作集に再録される。これは、異例というより、異常である。インベルは、あきらかにスターリン個人の許可の下に、特別待遇をうけている。

独裁的国家権力は、迫害の対象にする集団の中から、特定の個人を例外として使役する。例外者は、殺されないから、被迫害者の内から、迫害の一般原則を突破しようと死力をつくす者がでてくる。

有用性、有益性が例外をつくる。ユダヤ人絶滅政策をとるナチスは、「有益なユダヤ人」を生かしておいた。彼らは、無用の存在になれば、ただのユダヤ人として殺される。だから例外者は、強制しなくても、人の何倍も努力して、有用性の権化になろうとする。このさい、雇主は、迫害者でありながら救済者となる。拾いあげられ雇われた者は、主人にたいして病的に忠実な僕となる。

スターリン体制下で選抜された例外者の典型は、アンドレイ・ヴィシンスキイである。迫害の実務と理屈づけの専門家であり、検事総長として「モスクワ裁判」劇を演出したヴィシンスキイは、政治的経歴に大きな汚点があった。「人民の敵」に死刑判決をいわたした彼自身が、当時のしきたりからすれば、「人民の敵」として銃殺される方が自然であった。

ヴィシンスキイは、青年時代にメンシェヴィキー党に入り、武闘団をひきいてはなばなしい活躍をした。メンシェヴィキーは、ボリシェヴィキーの敵であり、スターリン体制下では、これは、犯罪的経歴になる。メンシェヴィキーであったという点では、ヴィシンスキイは、トロツキイと同罪である。

ヴィシンスキイは、帝政時代に革命運動で投獄されたさい、極めて軽い罰しか受けていない。彼が官憲と特殊な関係にあったことを示すこの事実は、関係者に知られていた。

1917年の二月革命後、ヴィシンスキイは、モスクワ市ヤキマン区警察第一管区署長になり、ひきつづいて、同第一管区区長となる。10月にレーニン逮捕の命令が法相からだされ、ヴィシンス



キイは、捜索の仕事にたずさわった。

十月革命後、きのうまで敵であったポリシェヴィキー政権下で仕事にありついため、彼は、かつて獄中で知りあったスターリンのところへ行った。この時からスターリンは、彼をとりたてていく。国内戦でポリシェヴィキーの勝利がはっきりし、もはや旧体制への復帰がなくなった1920年2月、ヴィシンスキイは、ロシヤ・ポリシェヴィキー共産党へ入党する。彼のような傷物が入党できたのは、スターリンのおかげであった。スターリンは、この男が自分にとって役に立つ有能な働き手だと見ぬいたのだろう。

十月革命でさまざまな分野から権威者、実力者が追い出され、その空席へ若い未熟な専門家と素人が、政治的忠誠度に応じて坐ることがしばしばあった。革命は変身をうながす。ヴィシンスキイは、法曹界と学問の分野でめざましい出世をする。1925年には41才で、それ相応の学問的業績なしに、上からの推薦により、モスクワ大学学長になった。

スターリン体制は、貧困が「敵」のせいであることを民衆に納得させるために、生産現場における「妨害行為」をでっちあげて、「経済的反革命」が社会主義建設をさまたげているのだと、見せしめの裁判をおこなった。このおかげで、ヴィシンスキイは、大活躍の場を与えられた。ドンバスのシャフチンスキイ地方における「妨害」の裁判では、モスクワ大学学長の身で裁判長をつとめた。上のおもわくどおりの判決を下し、スターリンを満足させ、これ以後、この種の仕事が彼の十八番になる。その働きぶりを評価されて、1931年にはロシヤ共和国検事総長兼法務人民委員代理に、そして、1935年、「モスクワ裁判」にそなえるため、ソヴェト検事総長に任命された。

「モスクワ裁判」では、一つまちがえば自分自身が被告席へ転落することになる過去の傷への恐怖から、ヴィシンスキイ検事は、かつての仲間メンシェヴィキーをも「人殺しの徒党」だとのしり、いかに自分が彼らと遠い存在であるかを印象づける。「モスクワ裁判」が終わると、ヴィシンスキイは、ヤゴダ、エジョーフのように使い捨てにされるのではなく、かけがえのない能吏として副首相に転出した。スターリンが彼の傷の効能を信じたからである。だから、その後も、スターリンの命令でおこなわれた、「カトゥイニの森事件」とよばれるポーランド人将校の集団虐殺を、ナチスになすりつける仕事などが、ヴィシンスキイにまかされた。自分もポーランド人であるヴィシンスキイは、これもうまくこなした。

スターリンがヴィシンスキイを古傷という手網であやつっていたことを見事に立証する物がある。第二次大戦後、ウクライナ共和国の外相ドミトリイ・マヌイルスキイは、ヴィシンスキイが、皇帝の政治警察の協力者で、ポリシェヴィキーを警察に売ったこと、および、彼が全く信用できない人物であることをスターリンに知らせた。スターリンは、ヴィシンスキイに、この密告状を贈呈した。<sup>(26)</sup>このおかげで、ヴィシンスキイの古傷の一つが新鮮になった。このあと、ヴィシンスキイは、外務次官から外務大臣に昇格する。

ヴィシンスキイは、スターリン体制をになう高位高官の一人として、特権的な生活をおくった

が、安らぎはなかった。「正直に言うと、朝から晩へと一日が過ぎたら、やれ有りがたい、という生き方をしている」<sup>(27)</sup>と、部下であったグロムイコに語っている。生きるのに手をぬくことはできず、彼は、極めて勤勉な一生をおくった。彼は、速記者に演説の原稿を口述しながら、急死した。働きながら死んだのである。

インベルもまた勤勉であった。ヴィシンスキイは、命とりになる傷のおかげで出世した。権力者がそこに利用価値を認めたら、内に秘めた毒は救命薬になった。ヴィシンスキイは、傷のおかげで殺されなかった。インベルも傷の克服のために働き続ける。

## 6

1934年の作家同盟創設大会の正代議員は、インベルもふくめて377人であった。このうちの約120人が、スターリン時代に殺された。その殺害は1930年代後半に集中し、90人強が犠牲になっている。正代議員のはぼ4人に1人が「モスクワ裁判」の時期に消されたのである。これ以外に、流刑になった者、収容所へ入れられた者がたくさん居たのは言うまでもない。しかし、インベルは無傷であった。

それどころか、インベルは勲章をもらったのである。1939年1月31日、ソヴェト最高会議幹部会は、文学者を対象にしてレーニン勲章21人、労働赤旗勲章49人、栄誉勲章102人の叙勲を発表した。<sup>(28)</sup>レーニン勲章の叙勲者のなかには、1年前に不当な逮捕や拷問についてスターリンへ直訴状を送ったショロホフがいる。

インベルは、命びろいしただけでも大儲けのところへ、栄誉勲章を授けられたので、狂喜する。この喜びはこの年中つづく。

叙勲者の名簿は、スターリンが最終的に作成する。彼が削ったり、新たに入れたりすることに誰れも異議をとない。この名簿には独裁者の仕事の跡がはっきり残っている。詩人マルガリータ・アリゲールは、栄誉勲章をもらった。氏名はアルファベット順にならんでいるので、彼女は最初の方にくるはずだが、アリゲールがオリゲールと誤って記されているので、彼女の姓名は67番目になっている。関係者は、この誤りにすぐ気づいたはずだが、誰れもスターリンの仕事に手をふれる勇気がなかった。<sup>(29)</sup>

インベルが名簿に入っているのは、スターリン個人の意向のあらわれであり、価値判断の結果である。したがって、叙勲は、身の安全の保証になる。しかし、弾圧する政治的必要が生じれば、どんな受賞者であれ叙勲者であれ、無防備である。

インベルの予期しない陰謀が準備される。

文学者たちの叙勲から3ヵ月たった1939年5月3日、リトヴィーノフ外務人民委員が解任される。リトヴィーノフを頭とする、ユダヤ人外交官たちのスパイ・テロ組織についての脚本が準備された。彼の側近が逮捕され、拷問にたえかねて、在りもしない組織について自白させられた。

これにもとづいてユダヤ人の大使たちを逮捕し、外務人民委員部からユダヤ人を一掃する計画である。

リトヴィーノフの後任モーロトフ外務人民委員は、犬猿の仲であったソヴェトとドイツの関係改善を、駐ソ・ドイツ大使シュレンブルグに申し出た。ユダヤ人リトヴィーノフは、ナチスとの交渉相手になれない。彼の解任の主因は、対ドイツ政策の転換である。全世界をゆるがした独ソ不可侵条約にむかって、事態は急速に進んでいく。この過程でユダヤ人外交官の粛清が準備されたのである。

これには2つの側面がある。一方では、ドイツと友好関係に入るために、交渉の実務機関からユダヤ人を取り除く必要性があり、他方では、国際世論、とくにソヴェトを支持する左翼陣営にこれがナチスと同類の犯罪だという印象をあたえる危険性がある。反ファシズム運動を行ってきたソヴェトが、ナチスのまねをして、ユダヤ人をユダヤ人であるという理由で弾圧することはできない。ユダヤ人外交官たちがテロリストやスパイであれば、好都合である。脚本が必然化される。この仕事には、内務人民委員部のユダヤ人官吏がたずさわった。<sup>(30)</sup>傷をもった者が最もよく働く、という人間観がそこにみえる。

一味の名簿には著名な外交官にまじって、2人のユダヤ人文筆業者——インベルとミハイル・コリツォーフが入っている。<sup>(31)</sup>インベルは、革命前に西ヨーロッパで生活しただけでなく、革命後にも何回か外国出張している。彼女をスパイにしたてるのはかんたんである。メキシコにいるトロツキイとインベルが結びつけられたかどうかは、不明である。

8月23日、独ソ不可侵条約が結ばれ、双方とも、相手をだましこんだと勝利を味わった。ヨーロッパの共産党からは、ヒトラーとの野合に憤慨して脱党する者がでてきた。ソヴェトは、外国で支持者を確実にへらした。

独ソ不可侵条約は、ヒトラーに戦争する自由をあたえた。9月1日、ドイツ軍はポーランドに侵入し、9月3日、イギリスとフランスはドイツに宣戦布告し、第二次大戦が始まる。条約調印から10日間で世界は激変する。ドイツの占領地ではユダヤ人絶滅の大事業がおこなわれる。

この新しい状況下では、どのような体裁であれ、ユダヤ人迫害をおこなうことは、国際政治の利害から判断すれば、ソヴェトに政治的損害をもたらす。リトヴィーノフすら逮捕されず、作戦は中止された。逮捕予定者たちのなかには、単にユダヤ人であるだけでなく、別の理由で処刑する必要のあった者がふくまれていた。したがって、このような計画があったことを知らず外交官の仕事を続けていく者もいれば、別件で逮捕され処刑される者もでてくる。

反ファシズムの闘士としても国際的に知られていた、当時ソヴェト最大の言論人ミハイル・コリツォーフは、すでに1938年12月12日に逮捕されている。彼は、1940年2月2日に銃殺される。ところが、インベルは、無事である。知らぬが仏のインベルは、1939年を幸せな年だと思う。

1939年12月30日

今年は私にとって幸せな年だった。しかし私はあまり働いていない。幸福は私にとって本当に有害なのだろうか。(32)

近年の恐怖と不安が、あきらかに仕事の原動力であった。叙勲の喜びの余韻が続くなかで、気がゆるみ、仕事の成果はあがらなかった。幸福が仕事の邪魔をするという実感を、これから先なん度もインベルは経験することになる。

幸福は、しかし、死の危険性と紙一重であった。勲章が幸福という幻覚症状をつくりだし、彼女は、「人民の敵」に転落する瀬戸際で、幸せな気分ひたっていた。

民主主義を知らない国家権力の損得勘定が、生身の人間を処理する。だから、献身的に奉仕奉公しても、むくわれる保証は全くない。しかし、それ以外に道はない。だから、インベルやその他の大勢は、ただひたすら上を見ながら働き続ける。

トロツキイの血縁という特殊性が、インベルに特殊な行動をとらせたのではない。彼女の言動は、スターリン体制下の人間の典型的な反応である。彼女の運命の特殊性は、彼女に最もありふれた、最も一般的な行動をとらせたのである。

この意味で、インベルという凡庸な詩人が、スターリン体制下の文学者を代表するのである。

#### 注

1. Вопросы литературы. Выпуск 5. 1994. с.286.
2. Вера Инбер. Избранные стихи. "Советская литература". Москва. 1933. с. 94.
3. Моря соединим! Стихи и песни на Белморстрое. Издание Культурно-воспитательного отдела Бел-балт. лагеря ОГПУ. Медвежья гора. 1932. с. 5.
4. А. Авдеенко. Наказание без преступления. "Советская Россия". Москва. 1991. с. 13.
5. Первый всесоюзный съезд советских писателей 1934.  
Стенографический отчет. "Художественная литература".  
Москва. 1934. / Репринтное воспроизведение. "Советский писатель". 1990. / с. 546.
6. Там же. с. 548.
7. Литературная газета. №13. 29 февраля 1936.
8. Московские новости. №25. 21 июня 1992.
9. Там же.
10. Там же.
11. Там же.
12. Там же.
13. Стихи и песни о Красной армии. "Художественная литература". Ленинград. 1938. с. 63.
14. ф. Чуев. Сто сорок бесед с Молотовым: Из дневника ф. Чуева. "ТЕРРА". Москва. 1991. с. 390.
15. Вера Инбер. Избранное. "Советский писатель". Москва. 1947. с. 160.
16. Там же. с. 162.

17. Вера Инбер. Собрание сочинений в четырех томах. т. 4.  
“Художественная литература”. Москва. 1966. с. 453.
18. Там же. с. 146.
19. Огонек. №24. 1995. с. 60.
20. Литературная газета. №43. 1992.
21. Л. Троцкий. Моя жизнь. Опыт автобиографии. “Панорама”. Москва. 1991. глава 3.  
Вера Инбер. Избранная проза. “Художественная литература”.  
Москва. 1952. с. 3—6., с. 96—103.
22. Лидия Шатуновская. Жизнь в Кремле. Chaldze Publications. New York. 1982. с. 29.
23. Там же.
24. М. イーストマン 大輪盛登訳 『若き日のトロツキー』 風媒社 1972年 26ページ
25. Осмыслить культ Сталина. “Прогресс”. Москва. 1989. с. 176.
26. Инквизитор. Сталинский прокурор Вышинский. “Республика”. Москва. 1992. с. 82.
27. Там же. с. 298.
28. Новый мир. №2. 1939. с. 32—34.
29. 最初の名簿を見たとき、オリゲールを見て奇妙に思ったが、深く考えなかった。アルカージィ・ヴァクスベルグがこの誤りに政治的意味を見いだした。これは正当であり、同意する。
30. Arkady Vaksberg. Stalin against the jews. Alfred A. Knopf. New York. 1994. p. 85.
31. 同上
32. Вера Инбер. Собрание сочинений. т. 4. с. 454.

(1995. 8. 24 受理)